

京極読書新聞 <第47号>

発行日 平成25年 7月 1日(月)
京極町生涯学習センター湧学館

しゅうちん

京極町の民家から「袖珍文庫」が出土!!

山のような積雪と厳しい寒さをもたらした今年の冬。三月、京極町の、とある家の屋根に降り積もった雪が氷塊状となって下へ落ちてきました。雪の塊は1階の壁側に当たり、民家の壁に穴を開け、壁に張ってあった配管をぐちゃぐちゃに壊してしまいました。そして、すべてはそこから始まったのです——（湧学館／新谷）

1. 「袖珍文庫」の発見

長い冬がようやく終わりつつあった今年の五月頃から、その家の1階壁面の修復が始まりました。壁面の裏側は物置として使っていた場所です。普段は滅多に行かない場所ですが、工事の関係で自然と物置に出入りすること多くなり、そこに置かれていた品物にも目が行くようになりました。その中から、ご先祖が使っていたらしい明治時代の品々や書籍が大量に出てきたのです。今回ご紹介する「袖珍文庫」も、そういう流れの中から出てきたもののひとつです。

まず、物置からガラス枠で蓋をされた状態の木箱が発見されました。中を見てみると、文庫本くらいのサイズの、形が揃った本が並んでいます。その内の、数冊ほどをサンプルで湧学館に持ってきていただきました。



木材の通気性とガラスの防水性が「袖珍文庫」を百年守ってくれました。

その時点で、「袖珍文庫」であることが判明。あわてて、残りの本については、決して素手で触ることなく、木箱全体を湧学館に持ってきてもらうようお願いしました。

2. 日本の「袖珍文庫」の所蔵状況

「袖珍文庫」は出版界・図書館界では有名な本なのです。出版史上、日本で最初に発売された「文庫本」。日本の古典籍校訂本が中心だった「袖珍文庫」。講談本を次々と文庫本化していった「立川文庫」。この二つを知らないと大恥をかきます。図書館学の講義では「袖珍文庫のタイトルや著者名くらいスラスラ正しく読めないと単位あげないよ」と言う先生はざらにいました。図書館員の知能テストで、「立川文庫を読みたいのだが…」という質問はよく使われます。で、これを、現代の新潮文庫や角川文庫が並んでいる書架に案内して「文庫本コーナーはこちらです」などとやると、一生バカにされること必定でしょうね。

……歴史が古く今日も刊行を続けているものとして、1867年に発刊されたドイツの『レクラム文庫』（レクラムス・ユニベルザール・ビブリオテーク）が世界的に著名である。わが国のものでは、富山房（ふざんぼう）の『袖珍（しゅうちん）名著文庫』（1903）がもっとも早い。「袖珍」とは昔から小型本をよぶときに用いられた名称で、この文庫は当時輸入され始めていた『レクラム文庫』やイギリスの『カッセルズ・ナショナル・ライブラリー』（1886）に倣った国文学の校訂本だった。……

日本大百科全書（小学館）／「文庫本」の項より



京極読書新聞は
毎月1日発行です。

かように、図書館員の基本中の基本「袖珍文庫」ですが、しかし、「袖珍文庫」を実際に見た図書館員となると話はがらりと変わります。おそらく誰も見たことないのではないだろうか。ものすごく数が少ないから。どれくらい少ないか。試みに、道内の公共図書館・大学図書館をすべて所蔵調査しましょうか。思った通り「全館所蔵なし」でした。全滅です。理論的には、国内で出版された本はすべて所蔵しているはずの国立国会図書館にしても、所蔵は「27タイトル」とどまります。世界中の大学図書館をすべて検索しつくしても、所蔵は「34タイトル」。それらの状況を思う時、この写真の持っている破壊力がどれほどのものか、想像してみてください。

木箱に入っていた「袖珍文庫」35冊と、その他の小型本8冊を、一度箱の外に出しました。木箱の中で百年間眠り続けたおかげで、背文字の金箔もはがれていない、まさに、美品中の美品。3ページは、その35冊のリストです。

西行法師「山家集」の美しさはどうでしょう。

国立国会図書館にも、大学図書館にもない、今ここにあるだけの一冊です。



□□家所蔵「袖珍文庫」(主に集文館版) 35冊

★国立国会図書館で所蔵していないもの

☆大学図書館で所蔵していないもの

袖珍文庫	タイトル	著者	発行年	所蔵
第1編 第2編 第9編	正史實傳いろは文庫 上編，中編，下編	為永春水著	1910-	
第3編	武將感状記	熊沢正興著	1910	★
第4編	文章軌範：全	謝枋得編	1913. 11	★
第6編	俳諧七部集：全	鈴木種次郎編輯	1910. 8	★
第8編 第12編 第17編 第20編	修紫田舎源氏 1-4	柳亭種彦[作]	1910-	
第19編	東海道膝栗毛 下編	十返舎一九著	1910	
第26編	雨月物語；聴耳世間猿	上田秋成著	1910. 12	
第28編	浮世風呂	式亭三馬著	1911. 2	
第29編 第37編 第63編 第71編	繪本太閤記 1-4		1912. 12-	
第30編 第52編	常山紀談 1-2	湯浅元禎著	1911-	
第31編 第42編 第59編	釋迦八相倭文庫 1-3	万亭応賀著	1911. 3-	
第32編	風俗文選	[森川許六編]	1911. 3	★
第35編	世間子息氣質；世間娘氣質	[江島其磧著]	1911	★
第36編 第74編	近世説美少年録 1-2	曲亭馬琴著	1911. 5- 1913. 8	
第38編	松の葉．松の落葉	秀松軒[編] 大木扇徳	1911. 5	★
第41編	花暦八笑人	瀧亭鯉丈作	1911. 6	★
第47編	源平盛衰記 1		1911. 11	★
第53編	神皇正統記	[北畠親房著]	1911. 11	★
第56編	山家集：全	[西行法師著]	1912. 12	★ ☆
第60編	近世畸人傳	伴蒿蹊著	1912. 3	★
第65編	木曾街道続膝栗毛	十返舎一九著	1912. 5	★
第66編	俳人の紀行文		1912. 10	

袖珍文庫と『源平盛衰記』をめぐる

村山功一 〈『平家物語』を読む会〉

町内在住の方が所有する“袖珍文庫”コレクションを拝見しました。ご先代の方のコレクションとのこと。現在の文庫本よりさらに小型のこの文庫は、明治中期以降さまざまな出版社から刊行されました。古典中心に編纂されたようです。これらの古典は、江戸時代の作品やこの時代の人々に広く読まれていたものを、明治読書人のニーズに応じて出版したものと思われます。この方のコレクションも、江戸後期に空前のベストセラーとなった『修紫田舎源氏』(にせむらさきいなかげんじ)をはじめ、江戸時代の作品が大多数を占めています。

その中に『源平盛衰記1』(以下『盛衰記』と記します)がありました。“袖珍文庫”のシリーズには『平家物語』(以下『平家』と記します)が『盛衰記』にさきがけて刊行されていますが、この方のコレクションに『平家』はありません。そこにささやかな興味をいただきました。なぜ『平家』を買わず『盛衰記』を買ったのか……。

『平家』は、実は厄介な古典なのです。それは本文や内容などが微妙に異なる『平家』が多数存在するからです。これを「異本(諸本とも)」といい、その数70種とも80種ともいわれています。『盛衰記』もその異本のひとつです。『平家』には、二つの系統があります。まず、琵琶法師が語る「平曲」の一種の“台本”をまとめ、整えたグループを「語り本系」といいます。国語の教科書に載っている『平家』は、この語り本のひとつで、最も完成した形といわれる「覚一本」を底本にしています。単に『平家』といえ、ば、「覚一本」を指すといっても過言ではないでしょう。一方、琵琶法師の台本ではなく、始めから読み

物として成立したグループを「読み本系(または増補系)」といいます。『盛衰記』はこのグループです。

『盛衰記』には『平家』には見られない記事・史実・説話が多数ありますが、なによりの特色は、武士の活躍を詳細かつ具体的に、そしてややオーバーに講談的痛快さをもって描く傾向があります。勇敢に戦い、潔く死んでゆく……その姿は武士の理想像だったわけです。さらに、江戸期に隆盛をみた歌舞伎、浄瑠璃、草紙などの演目や題材に多くの話題を提供したのも『平家』ではなく『盛衰記』でした。こうしたことから江戸期には武士ばかりではなく町人も、『盛衰記』の活劇的な面白さに魅了され、広く読まれていたものと思われます。さらに『盛衰記』は、あまりにも大きく『平家』と違うため、まったく別の独立した物語とされていました。それが、研究の結果『平家』の異本とされるのは大正末期を待たなければなりません。

そこで、ご先代が『盛衰記』を選んだ理由として、①江戸時代には『盛衰記』は広く読まれ、圧倒的に面白いということを知っていた。だから迷わず『盛衰記』を購入した。江戸の教養を身につけた知識人の判断。

②『平家』はよく知っているの、それとは別の物語として『盛衰記』を購入した。当時はまだ『盛衰記』が『平家』の異本とは考えられていない。

③『平家』と『盛衰記』とどちらが面白いのか検討し、その結果『盛衰記』を選んだ。

以上のどれかだろうと考えました。もちろん、真相は分かりません。残念！

発行

京極町生涯学習センター湧学館
〒044-0101 京町字京極158番地1
TEL 0136-42-2700(代表)
FAX 0136-42-2032
E-Mail yugakukan@town-kyogoku.jp



ホームページもご覧ください
<http://lib-kyogoku.cubet.com/>

